

母ちゃんがんばるよ

— 活力ある婦人部活動のために —

山北町漁業協同組合 漁協婦人部

加藤 道子

1 地域の概況

私の住んでいる山北町は、新潟県の最北端に位置し、山形県に隣接している。

景勝「笹川流れ」を代表とする美しい海岸線が26kmに渡って続いており、初夏の頃には岩ユリ、秋には紅葉とたいへん自然に恵まれた環境にある。

2 漁業の概要

私の所属する山北町漁協は、寝屋地区に組合本部・荷捌き所を置き、3ヶ所の支所と5つの漁港を有している。

総組合員数は271名で、正組合員数が186名、准組合員数85名で、近年は高齢化に伴い減少傾向にある。

主な漁業種類は、小型底曳網・板曳網・刺網・定置網などを主体にした沿岸漁業で、平成7年の水揚げ量は1,670t、金額は11億3,000万円であった。前年と比較して1億1,000万円減少しているが、これは漁業資源の減少と荒天による出漁日数の不足によるものと思われる。

3 研究グループの組織と運営

現在の婦人部は、79名の部員で活動しており、これまでに町の産業祭・魚祭り、デパートへの出店、農山漁村交流会などのイベントに参加し、魚食普及や地域おこしを進めてきた。

さらに加工品の製造・販売、合成洗剤追放、海難遺児募金、漁協貯金と共済の推進、青年部との交流会、海浜の清掃などを行っているほか、視察や旅行などを通じて部員同志の親睦を深めてきた。

イベントへの参加は、昭和61年に新潟市の故郷逸品祭りに干し魚の加工品を出品したのが初めてであった。その時に、これまでは売りものにならなくて捨てていた、板曳網で獲れる小さなカニ（から揚げにして味付けするととても美味しい）を売ってみようと提案したところ、その役目が私の住む地区の部員に回ってきた。7名のメンバーで集落センターを借り、夜なべでカニのから揚げ作りをして、やっと間に合わせる事ができた。その時、私達は疲れてクタクタだったが、センター長から「あなた方もこんなに苦労したのだからセンターの使用料はもらえません」と言われた言葉は今でも忘れられない。

昨年10月22日の漁協主催の魚祭りでも、安い魚をどうしたらみんなにおいしく食べてもらえるかを考え、ホッケのすり身をそのまま売るのではなく、野菜と混ぜ、から揚げ

にして試食してもらったらよく売れた。ちょっとした工夫とアイデアしだいで消費者はすぐ反応するものだと感心した。

また、昨年からは婦人部員が作った加工品を一括して漁協で販売してもらえるようになった。その製品は主に地元の農協の食材用に利用してもらい、売上高は、約200万円になった。

町の産業祭と漁協主催の魚祭りでは、合成洗剤追放ということで「わかしお石鹼」を販売し、子供の下着などに石鹼が良いことを宣伝した。

海難遺児募金では、担当の部員が頑張ってくれたおかげで募金も思った以上に集まった。共済への加入も役員が推進に協力し、青年部との交流会では空き缶の投げ捨て防止や浜の美化運動に協力をお願いした。

この他にも公民館の事業で、EM菌を利用した生ゴミによる堆肥用のボカシ作りの講習会を地区で開いており、大変好評なので近く婦人部でも実施する予定である。これは魚などの残飯が入ることで、野菜や花壇作りに大変効果があり、化学肥料とは比べ物にならない。家庭の残飯や魚の屑を生ゴミとして出さないで、こういう処理をすれば家計の足しにもなり、町のゴミ問題や海の汚染などの環境問題がいくらかでも解消されるのではないだろうか。

4 研究・実践活動課題選定の動機

このように婦人部が積極的に活動することは、山北町漁協をアピールし、漁村の活性化につながると思う。しかし、さまざまなイベントに参加し活動することによって、婦人部の役員はたいへん忙しい思いをしてきた。これを解消するために平成元年に16名で構成する加工グループが結成され、4年間活発な活動を続けた。しかし、活動する上で規約などを特に定めていなかったため、加工グループと部員の間で加工品販売の方針に意見の食い違いがあり、婦人部の総会でもうまくまとめることができなかった。そこでしばらく冷却期間をおこうということをもみんなで決め、活動を中止することになってしまった。

私は、どうしたら再び婦人部としての活動ができるようになるのか、そのきっかけがいつ来るのかと考える日々が続くようになった。

5 研究・実践活動状況及び効果

やがて1年程たった頃から声が出てきた。「このままではやっぱりいけない、もしいざという時には、婦人部がなくてどうする。」同じように考えている人が大半だったと思う。

そしてあの事故が起きた。奥尻島の地震である。山北町でも津波で船が転覆し、水難救済会が出動した。炊き出しが始まり、私もすぐ組合に駆け付けたが、次から次へと部員が集まってくれた。やはり休部していても、みんなの気持ちは同じだということが分かって嬉しく思ったが、その反面、いつになったら再開できるかという不安も募っていた。そうこうしているうち、「婦人部の活動再開に協力するので、まとめてほしい」という組合の方からの要請があり、こうしてやっと婦人部は活動を再開することができるようになった。

加工品の販売については、婦人部活動から加工グループの事業を切り離すことでなんとか決着し、婦人部とは別に加工品の製造・販売を行うこととした。

ところが肝心の役員のなり手がなかったのである。

今まで役員は、会計から始まり、副部長～部長と順に役をやってきたが、いったん役員になると必ず最後に部長を務めなければならないということで、なかなか引き受ける人がいなかったのである。さまざまな理由を付けてことわれ、結局は個々にお問い合わせしてどうにかつないできたのが実情であった。そこで今回は、順番に役員になるのをやめて、漁業種別別に板曳網と刺網から2名ずつ、底曳網・エビ籠・船外機からそれぞれ1名を選んでもらって、合計7名が役員になり、この中から3役を選ぶことにした。こうすれば必ずしも部長を務めなければならないということがない。

この役員7名と各集落から出てもらった連絡員8名の合わせて15名のメンバーで2年間の任期を務めることになった。

さて部長になると大変である。精神的・経済的に大きな負担がかかる。3役は皆同じであるが、家の仕事が後回しになるため、まず父ちゃんの「くどき」が始まる。

私も7年間、会計から部長とやってきたが、活動を再開してからは精神的にも大変だった。さまざまな噂が流れてくるが、それをいちいち気にしては、婦人部の和が保てなくなってしまう。この2年間いつも考えていたのは、「以前の婦人部の姿に戻したい」そればかりが頭から離れなかったのである。

6 波及効果

そしてやがてそのチャンスがやってきた。去年の漁協主催の魚祭りである。山北町の漁業者が一堂に集まって行事を行うのは漁協始まって以来初めてのことだった。私も実行委員の一人として参加した。婦人部では、加工品の販売・鮮魚販売などに力を入れたほか、各コーナーへの協力を行った。当初なんだかんだ言っていた人達も、結局当日は他の人に負けず劣らず大声を出してお客さんに呼び掛けていた。無口な父ちゃん達もこの日ばかりは元気の良いこと、これが団結力だと思った。おかげで魚祭りは大成功となった。

魚祭りの慰労会では、婦人部もこの時とばかり、海の汚染問題や嫁不足など日頃から思っていたことを青年部の協力を頼んで、パフォーマンスで訴え、みんなに大変喜んでもらった。

最後には、上きげんで飲んでいる父ちゃん達を部員全員が囲んで、歌って輪になって踊り、盛大に幕を閉じた。あの時はみんなの気持ちが一つになり、これからの婦人部はもう大丈夫だと確信することができたのである。

7 今後の課題

農業では、これまで米は安定した価格で政府が面倒をみてくれたが、昨年から新食糧法により自由に販売できるようになったため、競争が激しくなり、農家もたいへんな時代になるものと思う。

一方、漁業の現状はどうだろうか。

漁業資源の減少が進み、魚価が安いまま厳しい経営が続いている。また、輸入水産物が洪水のごとく流れ込んできており、私達の加工品も年々売れ行きが悪くなってきている。このまま父ちゃん達に頼るだけでなく、これからは行政の力も借りながら、さまざまな面

で収入を得る工夫と努力を重ね、時代の流れに合わせた活動をしなければならない時にきているのではないだろうか。

あと10年も経つと漁業者の高齢化は一段と進むと思われる。今のうちから先を見越して高齢者でも収入が得られ、ゆとりある生活ができる方法を考えておきたいものだ。

幸いにも私達の海岸線を通っている国道345号線は、夏は海水浴客、春秋は観光バスがどんどん入ってきているので、これらの観光客を対象にして、地元の新鮮な魚介類や加工品などの販売ができたらと思っている。現在私達の組合には、旧組合本部の施設と空き地があり、ここを利用して事業ができれば婦人部はもちろん地域おこしとしても一つの拠点になるので、活気のある漁村になると思う。

今、私達婦人部員は、自分達の船が獲ってきた雑魚を加工したり、魚の行商をしたり、または農作業などでほとんどの人が忙しく働いている。そのため、婦人部で何か考えてもなかなか思うように物事が運ばない。しかし、活気のある住み良い漁村を作るためには1人や2人の力だけではできない。部員みんなの協力と結束があってはじめてできることなのだ。このことを私達一人一人が自覚し、行動することが大切なのではないだろうか。

1月下旬には婦人部の総会を開いたが、今年は総会だけで終わらせるのではなく、「婦人部員としてのあり方」についての講演を聞いた。みんな熱心に聞き入っており、「協同」の大切さを理解してもらえたようである。

これからは、女性社会だと言われており、私達も尻込みしないで自分の意見を述べ、積極的な行動のできる女性でありたいと思う。そして忙しい中にも一日一日を悔いのない毎日を送れるよう、明るい希望を持って頑張りたいと思う。

浜の母ちゃん達は、みんな元気だ。この元気をとりえにして、活気のあるそして夢の持てる婦人部を作っていきたいと思っている。